

僕、コロ！



涼一

第一章「僕、コロ！」

ボクは犬のコロ、この家で飼われている。

なんか体の調子が悪い。

何でもないのでクシャミを何回もしたり、

おとうさんが、ボクを放し飼いにしてボクは自由になったんだけど、

たべるえさがないし、しょうがないから、ときどき、いえにかえっている。

源一ちゃんが心配そうな、めをしてたから、かえるか。

「あれ？」

きみは、メリーじゃないか。

なんでこんなところにいるんだ。

「わたし、いくところがないの。」

「じゃあ、ボクのところに来なよ。」

そしてえさのあるいえにかえった。

「ここだとね、たべものにふじゆうしないんだよ。」

「いつまでもここにいていい？」

メリーが言った。

「いいよぼくのいえだから。」

「なんであんな、いぬ、つれてきたの、あのいぬは。」

おかあさんが、こまっためでぼくをみている。

おとうさんは、ぼくをみて、にこにこわらっている。

「コロ、かのじょつれてきたね。」

それにしてもメリーになんかあったのかな。

きれいだった白い毛がきたなくよごれている。

源一ちゃんがさびしそうな、目をしている。

どうしてそんな目でぼくをみるの、僕はクシャミするけど元気だよ。

「あのきたない犬をどっかにやらんとね。いえにすみついてしまう。コロだけでもたいへんなのに。もうすぐしぬからいいか。」

おかあさんがいった。

「えっ！しぬってどういうことなの？しぬってなあに？ぼくどうなっちゃうの。めりーをどっかにやるってどういうこと？」

しばらくするとどっかのおじさんが来てぼくをくさりにつないでメリーをどっかにつれていってしまった。

「やめろ！メリーはぼくのおよめさんだぞ！なにするんだ。」

ひっしにほえてたすけをもとめたけど、源一ちゃんはなにもしてくれなかった。

「これでいい。」

おかあさんがいった。

ぼくはどうなっちゃうの、このまま、またくさりにつながれて、さんぽもたまにしかできないで・・・

それよりしぬってなに？ぼくもどこかにつれられていくの。いやだ。いやだ。

このいえにいるんだい。

きゅうにいきがくるしくなってきた。こえがでない。

「あの犬はフィラリアにかかっている。もうまもなくしぬ。かわいそうやけど、しぬということはそういうことなんだ。源一あきらめなさい。」

おとうさんはいった。

おとうさんまでへんなことをいっている。ねえ、源一ちゃんしぬってどういうこと。ぼく生きているよ。

おとうとの、のぶあきちゃんもがっかりしている。

「コロ・・・もうすぐおむかえがくるね。ぼくらをちゃんとみまもっててね。」

源一ちゃんがおむかえがくるといった。

ぼくはだれかにひきとられるのか。そんな、いままでめんどろみしてくれたのに、いまさら、べつ
のいえに、いけだなんて、はくじょうだな、みんな。

第二章「ぼくしんじやった。」

ある夜源一ちゃんがきてぼくの、だいこうぶつのかまぼこをもってきた。

「だいこうぶつもってきたよ。」

「しぬまでくさりがあるなんてかわいそうだから。」

といっておとうさんはくさりをはなしてくれた。

さあ、きんじよまわりだ。

あれ？なんかげんきないなきょうは。

かまぼこをたべたからげんきがでるはずなのに。

まちのおれのむすこのところにいこう。

「げんきか。」

そうってあいさつした。

「なんだおやじ、あわせるかおもないくせに。いまごろのこのこやってきて、なんのつもりだ。

ん？なんだこのにおいは。くさったごみのおいがする。おいおやじ、もうおだぶつか。」

むすこがいった。

「なんだそれ、むすこのくせに、おだぶつってなんだ。」

「もうすぐしぬってことだよ。」

「おまえまでそんなことしているのか。しぬってなんだ。だいたいみんなそろってわかかわからないことばかりいって。」

「もうあえなくなるってことだよ。」

「いつだってさんぽのときにあいきているじゃないか。」

「ちがうだよもう、ほんとうにあえなくなるんだ。おやじ、いままでありがとうな。」

「よくわからないけどおまえとあうのはさいごか。」

「じゃあな。」

「じゃ。」

あのばかむすこが、すなおにありがとうといった。

さんぽのさいに、いつもほえてるくせに。

これがあうのがさいごなら、みんなにあいさつしていこう。

そうやってぼくは、みんなにあいさつしてみた。

きんじょのいぬにあいさつしてまわった。

あめがふりだした。

「コロ！」

源一ちゃんのコえがする。

「コロ！」

あれおとうさんのコえもする。

みんなしんぱいしてるんだな、かえってねよう。

そうやっていえにかえってねばしょにねた。

「あれ、コロかえっとう。」

源一ちゃんからだきしめられた。

いつまでもこんやは源一ちゃんがみている。

のぶあきちゃんまできた。

やっぱりぼくをかわいがる。

なんだかねむくなってきた。

ねよう。

第三章「しろいかいだん」

ずいぶんねたな。

あれ、まっくらだ。

おーい。だれもいない。

にわのかしのきの、あたりにいるようだ。

じめんをほってないのに、じめんのなかにいる。

みんなぼくにてをあわせている。

そうかしぬってこういうことか。

ぼくはしんだんだ。なんでか知らないけど。
おわかれじゃないよ。
あれ？しろいかいだんがある。のぼってみよう。

ぼくはしろいかいだんをどこまでものぼった。
かいだんのうえについたときに、
なんか、もんがあった。
あかない。
ずっとすわっているけどあかない。

このとびら、いきているものはおるべからず。

なんかにんげんのもじがかいてある。
なんだろう。
まえあしでおしてみよう。こういうのはとくいだ。
あっ、あいた。
まぶしいひかりがさすところだ。
いままでみたことがない。
びっくりだ。
あれ？

そうげんがひろがってる。
だれかいる。
あのだれかいるいえまでだいぶとおいけど、おなかへったので、たべものがあるだろう。
だいぶあるいてぼくはそのいえにいった。
なんか、かいだことのあるにおいだ。

「コロちゃん」

そういってばあさんがぼくにはなしかけた。

「だれ？」

「源一ちゃんのいえのばあちゃんだったものよ。」

あれ？ぼくはなしがつうじる……。どうしてにんげんのことばがしゃべれるんだ。ぼくはわんわんとしかいってないのに。

「ここはね、にんげんもいぬも、みんななかまなのよ。」

そういってばあさんはじいさんをつれてきた。

みんな、おとうさんと源一ちゃんたちのおいがする。

「ぼくここにいていいんですか。」

「いいよ。もうしおくれた。わしはきみのおとうさんのおとうさん。じいさんだ。」

「だってぼくのおとうさんはひとりしかいないからおとうさんのおとうさんといわれてもわかり

ません。」

「そうか、わはははは。」

しばらくすると、

黒い犬と白い犬がやってきた。

「やあコロ。といってもみてたけどね。」

「なんだきみたちは、いぬはいぬらしく、わんわんとほえたらどうなんだ。だいいち、あったことがないよきみらには。」「ぼくはげんいちちゃんのおにいちゃんにかわれていた、くろ。」「ぼくはしろだよ。」

「どっちもしんだんだ。」

しんだってことしってるの。

しんだのぼくだけかとおもったら。

ここではしんだのがあたりまえなんだな。

「よろしく」

そうって、ぼくはしろとくろとあそんだ。

つづく

第四章「てんごくでのくらし」

まもなくしてひとりのおとこのひとがきた。

「コロ、僕は豊三。おとうさんのきょうだいだよ。」

「なんでみんな、ぼくのことしってるんだ。それより、源一ちゃんにあわせてよ。」

「きみはもう源一ちゃんにしばらくあえない。」

「どういうこと？こどこなの。」

「てんごくだよ。」

「よくわからないけどおじさんたちとくらすんだね。」

おじさんは、はなしをつづけた。

「ぼくはね、きみのかいぬしのおとうさんがわかいころに、せんそうがおきてしんだんだ。けっかくというびょうきでね。」

「あえないの？みんなには。」

「みんなしんだらくるんだ。じきあえるよ。」

「ここはそうげんがひろがっていきもちいいところだね。」

つづく

第五章「ふしぎないけ」

しばらくして、源一ちゃんのおじいさんがぼくにようじを、いいつけた。

「コロ、このいえにいつてきなさい。」

とってかみをわたした。

とうきょう？ぼく、もじがよめる。

にんげんの、かいたもじが、よめる。

「コ口、あのかいだんをおりなさい。」

そうおじいさんがいったので、またしろいかいだんをおりた。

かいだんをおりると、たくさんじゅうたくがならんだところについた。

なんだろう？

またおとうさんとおなじにおいがする。源一ちゃんたちともだ。

「ますみ」

あれ？ぼくのいえとおなじみょうじだ。

はいつてみよう。

なんかくろとしろの、ぬのがある。

だれかここにはいつている。

「あれ？」

それをみているおなじひとがいる。

「おじさんしんだの？」

「なんだこのいぬは？わしはしんだあとだ。」

「おじさんしんだってしってるの？ぼくはかわれていたいぬです。おとうさんのところにいました。」

そういつておなじにおいがするひとがいたので、みちあんなないをした。

「ぼくはせいじっていいます。」

「ぼくのなまえはコ口。ますみのいえでかわれていたいぬです。おとうさんとおわかれをしました。」

しろいかいだんがまたあらわれたのであんなないした。

「これをのぼったところにみんないます。」

「みんなって・・・」

おなじもんをくぐりまたみんなのところにあいにいつた。

またそうげんがつづき、さっきのいえがあつた。

あかいやねのいえだ。

「おとうさん、おかあさん。」そういつてそのひとはなきくづれた。

「おかえり。」

「おかえり。」みんなおかえりっていつている。

いえからいえにあんなないしただけなのに、

そうか、これがほんとうのいえなんだな。

どうしても、げんいちちゃんにあいたくて、しろいかいだんをおりた。

そうすると、源一ちゃんのいえについた。

源一ちゃんのいえはなつやすみになっていた。

「おれ、しりつちゅうがくおちたけ、じもとのちゅうがっこうに行く。」

いとこのたけしちゃんがいた。

「おれは、きょうていこうこうには行って、さっかーをする。」

たけしちゃんがいった。

源一ちゃんぼくはここだよ。気づかないの？ぼくはここだよ。

ころはいつもどおり、さんぽみちをいった。

きょうはぼくのむすこにあいさつしていくか。

「やあきたよ」

コロのむすこはコロがみえないので、ころに気づかない。

「なんでむしするんだ。なんとかいえ。」

「・・・」

「あれきこえないんだ。ぼくがしんだから。」

しぬっておもったよりたいへんだぞ。

コロはおもいました。

おなかがすかない。

こんなにじゆうなのに、ただぴろいところにいくとぼくがひとり。

いえにかえってあのかいだんをのぼろう。

かいだんをのぼるとみんないた。

あかいやねがあって、みんなコロのことをまっていた。

おばあちゃんが、いけをみているので、なにかとおもったら、

源一ちゃんのいえが、いけをとおしてみえるのだった。

しばらくいけをみていた。

たけしちゃんがこうつうじこっていうのでしんでいる。

源一ちゃんがわんわんないている。

なんだこのいけは。

するとおばあさんはいった。

「このいけはね、なんでもうつしだすいけなの。みらい、かこ、げんざい。」

「?????」

わからない。なんのことだろう。

ひょっとして、たけしちゃんしんじょうの。

つづく

第六章「ぼくかなしい」

しばらくすると、もんから、メリーがまよいこんできた。

「メリー！」

「わたしどうしたのかしら、きづいたらしろいかいだんがあらわれて、のぼって見たら、あんたがいる。」

「メリーしんだんだよ。」

「わたしね、コロとわかれたあと、知らない、とおくの、いちょうのき、まではこぼれたの。そこで、くさりにつながれて、わんわんほえたわ。コロー！コロー！って。そしてきづいたらこうなっていたのよ。」

コロはそれをきいてはじめてしぬのが、とってもかなしいことだとわかりました。

そしていぬなのに、なみだがとまりませんでした。

「ぜったいこんなしにかたしていいはずない！ぼくはみんなにおわかれをいわれてしんだのに。」

つづく

第七章「たけしちゃん」

おばあちゃんが、いけをみながらいいました。

「コロ、このいけにはいったらいけないよ。おぼれて、みんなにみえてしまうからね。」

しばらくすると、

たけしちゃんがきました。

またしんだんだ。

コロはそうおもいました。

かなしい。

たけしちゃんがいいました。

「ここてんごくだろ。ほんとうにてんごくってあるんだね。コロじゃん。」

たけしちゃんはすなおだからほんとうにてんごくをしんじてたんだな。

コロはおもいました。

おばあちゃんがいいました。

ここはずーっと永遠にとちがひろがっていて、じかんがないのよ。てんごくには、じかんがないの。

あらゆる、いじん、はんざいしゃ、こども。おとな。みんないる。

たけしちゃんがいけをのぞきこみました。

へーみらいがうつってるよ。

しゃべりかけてみよう。

源一ちゃんに。

「おーい、きこえるか。源一。かんさいで、おおじしんがあるぞ。」いけをみていて、げんいちがあわてだしました。まるでしっているようでした。」

げんいちちゃんがびっくりしている。

「こんどはそれをしってかわのほとりでないている。」

そうすると、いろんなかいだんから、いろんなひとがきました。

「みんなしんだんだ。」

コロはかなしくなりました。

「こんどはどうほくでじしんがあるわよ。」

おばあちゃんがけわしいかおでいきました。

そういうと、きびすをかいして、あかいやねのいえに、なにやらそうだんにいくのでした。

「ぼくもいえにいつてみよう。」

いえにつくと、せいじおいちゃんが、豊三おいちゃんと、なんかいつている。

「だいたい、CIA,ちゅうごく、ぐーぐるがはんにんだな。それとあらぶもだ。あめりかもだ。ろしあもだ。」

「れいせんのとにつくった、ぶきでなにかしている。きしょうをあやつってる。じしんもだ。きたちょうせんが、ちかかがくじっけんをするたびに、じしんをおこしている。てれびも。ぱそこんもじょうほうをあやつっている。」

すると、いぬの、しろとくろがさわぎはじめました。

「いけをみてよ。とうほくでじしんがあつた。」

「ほんとだ。たくさんのひとが、みんなぼくみたいになつている。」

コロはいてもたってもいられず、いけにとびこみました。

おばあちゃんがいきました。「ころ！まあなんてこと。」

「しぜんとからだがあうごいたんだ。」

「でもだいじょうぶ、いぬかきとくいだから。」

あれ？いけにおぼれていく。どうなっちゃうの。ぼく。

つづく

第八章「たいへんだ」

きづいたらけせんぬまつていうかんばんがあるところにきていた。

つぎのしゅんかん、ころはびっくりした。

うみのみずがあふれかえつてきた。

きづいたらうみだった。

ころはいぬかき、しつづけた。コロはきづいた。源一ちゃんの生きてるじかんにきてることが。

「これいじょうかなしいひとをふやしてはいけない。」

しょうじょがおぼれそうだったのでおかに、じぶんでくわえてはこんだ。

しょうじょはきぜつしてつた。なめておこした。そうするとしょうじょは、おきた。

「こわかつたよー。わんちゃんあつた。」

たてもののしたに、まだ生きてるひとのにおいがする。

ころはほつた。しょうじょだった。どろをのんでいたがたすかつた。

しんだひとのかいだんがでてきた。たくさん。コロはそのひとたちといっしょにかいだんをのぼるのだった。

てんごくでは、それぞれのひとがそれぞれのいえにかえっていった。

つづく

第九章「源一ちゃんなにしてるの？」

てんごくではれーがんだいとうりょうというひとが、しんだのでばれーどがあっていた。

もうしでたら、してもいいらしい。ひとがたくさんいる。ほめたたえている。

じしんでしんだひともばれーどにさんかしている。

みんなほめたたえられている。

「ようこそてんごくへ。」てんごくのじゅうにんたちがいった。

コロはおもった。あんなかなしいできごとがあったあとで、そりゃないよ。

つづく

ふたたびいけにかえり、コロは源一ちゃんをみていた。

「なにかへんなにおいのするところにいる。とてもへんなにおいのするところだ。」

ころはふたたびいけにとびこみました。

そして源一のかよう、クリニックに行くのでした。

そしていきなり源一にあらわれて、いうのでした。

「源一ちゃんここ、くるところじゃないよ。いろんなへんなにおいがする。」

「おれは、とうとうコロがみえるようになった。びょうきもさいごだな。」

源一は、いった。

コロはいった。「源一ちゃんなんでこんなへんなにおいがするところにいるの？」

「ここはせいしんびょういんといって、こころのやまいのかかったひとのためのところなんだよ。」

「へー、やまいってなーに？」

「しぬやまいもあれば、なおらないやまいもあれば、なおるやまいもある。」

「ぼくはなおる。」

「あのね、じじょうしたら、なーんだってことになるよ。だからあんしんして。」

「そうか、ころがいうんだったらそうなんだな。」

といってしんさつしつってところには行っていった。

「かっていたいぬがみえます。」

せんせいがいった。

「げんかくがみえているようですね。くすりかえましょうか。」

そうって源一ちゃんはくすりというのをもらいにいった。

いっしょにやっきょくというところにはいった。

はいると、ぼくをみているおんなのじむいんというひとがいる。

源一ちゃんもそのひとをみている。そのひとは、ぼくがみえるらしい。

どうやら、源一ちゃんはそのひとがすきらしい。

かえりの、くるまにのって、源一ちゃんがかえろうとするので、ぼくもとびのった。

するとうしろからくろとしろのあかいらんぷの、くるまが、ごういんに、げんいちちゃんのくるまをとめた。

「2てんげんてんね。」

なんか、へんなわるいひとのような、いいひとのようなにおいがする。きけんだ。わんわん。ほえてもきづかない。

「コロ、また、たまにあらわれてね。」

ずっといたいけど、いえにかえったら、ほんとうのいえにかえんなきゃ。

かいだんをのぼってみるとあかちゃんがいた。

「ぼくね、うまれてすぐしんじゃったんだ。もういっかい、かあさんにあいたい。」

「いいよ。ぼくがつれてってあげる。せなかにのって。」

かいだんをおりるとそのこのおかあさんとおとうさんはうれしそうにしていた。

おとうとがうまれたのだ。

「よかった。あんしんしたよ。」

かいだんをのぼってぼくとそのこはもとのてんしのところにいった。

つづく

第十章「いかなきゃ！」

また、おばあちゃんがいけをみている。

「まもなく、ちゅうごくで、みんしゅしゅぎかくめいがおこって、それをきに、せかいへいわがおとずれる。」

またいけをみていると、源一ちゃんのけっこんしきというのがあった。あいては、ぼくのすがたがみえたひとだった。やっきょくのひとだった。

しあわせそうにおとこのこをかかえ、やがてろうじんになり、あたたかくしんだ。

「やあコロ。わしじゃよ。」

ふりかえるとおとうさんがたっていた。

「おとうさん。しんだんだね。あえてうれしいよ。」

こんどはかんだうのなみだだった。このときはじめて、かんだうするということをコロはおぼえた。

「おまえはね、スピッツとしばいぬのあいのこじゃったんだよ。」

おばあさんはおとうさんにあいさつしてなきながらあかぶきのやねにかえっていった。

あかぶきのやねのいえから、せいじさんがでてきて、いけをみながらいった。

あふりかというところでせんそうがっている。いっばい。

「きけんだが、コロ、おれといっしょにいけにもぐるか。」

「うん」

するとみたことないひとまでどんどんいけにとびこみだした。

あふりかというところは、せんそうがたえないところだった。

せんそうというのをおぼえたのは、じしんがあつてかなしいひとがいっぱいいるところだとコロはかんちがいしていた。

それでもこんどはちがった。ひととひとがけんかしてしんでいる。

またコロはせいじさんといけにとびこんだおおくのひとたちとしにそうなひとたちをたすけるのだった。せいじさんがいった。「コロ、おれに、あいであがある。」

そうって、ひこうきにのった。そしてみんなもおなじひこうきにのった。

そのひこうきは、ゼロせんというひこうきで、にほんのせんそうでいっぱいひとがしんでしまった。

あふりかの、そらを、ゼロせんが、なんきもなんきもおった。いろんなこくせきのひこうきもいた。

そして、てろりすとたちはいった。「カミカゼがきた。なんということだ。おれたちをすくいにきた。おーい。」「カミカゼ」ひとびとはそうくちぐちにいった。おびたしい、カミカゼはアフリカぜんどをおおった。ほかの、とまふおーくとか、みぐとか、いろいろなせんとうきがあつたので、あふりかのひとは、こんらんしてしまった。せいじにいちゃんは、せんそうのとき、ゼロせんのりだった。「あのせんそうはまちがいだつた。それとにている。このくには、にほんのまねをしている。ほろびる。だからみんなをきゅうしつするんだ。たままはない。たまもあたらなない。」「きゅうしゅつさくせんだ。」とって、ちゃくりくした。

あらぶのえらいひとのところにって、このせんそうをやめるようにいった。とつぜん、たまをうってきた。「あたらなないぞ！」てんごくのじゅうにんたちがいっぱいそろって、やめにはいった。みんな、たまはあたらなかつた。ぞつとした、あらぶのえらいひとは、わけをきいた。かいだんがあらわれた。「そこをのぼれ。」あらぶのえらいひとはそこをおそるおそるのぼつた。

かいだんをのぼると、ぜんうちゅうのしはいしゃがいた。そのひとから、あらぶのひとえらいひとは、

「アラーよ。とんでもないことをしてしまった。」「せんそうをやめます。」

あふりかにつくと、まだあんぜんじゃなかつたので、せんかんヤマトがうみにきた。とうごうへいはちろうというひとがのつていた。ゼロせんてみんなをいろんなところにはこんだり、ふねにのせてあんぜんなところになんかいもなんかいもいくのであつた。たまもない。てっぽうもない。なのに、このせんそうにかてた。てんごくのしょうりだつた。

つづく

第十一章「天国での結婚式」

かいだんをのぼってみると、源一ちゃんがいた。

かんげきのなみだをながして、コロはだきついた。

「コロびょうきはなおったよ。」

「パレードをしよう。」

コロはそういい、おーぶんかーにのり、源一ちゃんのパレードをした。

「なんか、ニューヨークヤンキースがゆうしょうしたみたいなぱれーどだな。」

「ぼくけっこんしきあげるんだ。」

コロがいった。

「メリーと」

けっこんしきはもりの、かしのきのしたでおこなわれた。

しんぷさんは、うちゅうのしはいしゃ、かみさまだった。いえずすでもなく、もはめどでもなく、ぶったでもなく、こうしさまでもなく。それらのひとはみんなよこにせいれつしていた。

「かみをしんじるか？てんごくをしんじるか？」ころはこれがかみさまだとおもった。

「あたりまえですよ。」

「じゃあちかいのきっすを。」

ぼくは、はじめてメリーとキスをした。いままでで、いちばん、しあわせなきぶんだった。

いつまでもいつまでも、コロとメリーをたたえるはくしゅは、とまりませんでした。

おしまい

僕、コロ！

<http://p.booklog.jp/book/64567>

著者：涼一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maruchansakana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64567>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64567>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ